

柳沢家筆頭家老柳沢権太夫保格の墓所について

西 海 真 紀

1. はじめに
2. 柳沢保格の事績
3. 菩提寺曹洞宗増福山興因寺

4. 柳沢保格墓所の調査成果
 4. 1 石造物
 4. 2 関連調査
5. おわりに

1. はじめに

柳沢権太夫保格⁽¹⁾は、宝永元（1704）年から享保9（1724）年に甲府城主をつとめた柳沢吉保の家臣である。家老として在国し、吉保を補佐した⁽²⁾。

吉保の最も信頼していた人物といわれ、宝永2年の柳沢家入部にあたっておこなわれた甲府城の大修築においては、「奉行」として棟札にその名を連ねた⁽³⁾。

平成2年からはじまった甲府城跡の整備事業では、発掘調査と併行して史料調査をおこなってきた。柳沢期の史料としては『樂只堂年録』『福寿堂年録』などのまとまった史料群があり、甲府城の整備において重要な情報を与えてくれる。しかしながら、在国して甲斐国の実務に当った藩士の史料などは、ほとんどその所在があきらかにされておらず、柳沢家の筆頭家老として在国した柳沢保格の甲斐国における業績についても、具体的にはいまだ明らかにされていない。

拙稿では、これまでほとんど知られていなかった甲府市興因寺にある柳沢権太夫保格の墓所について報告し、今後の甲府城関連史料調査への足がかりとしたい。



図1 興因寺および柳沢保格墓所位置図(平成18年測量、平成22年修正の甲府市都市計画基本図VIII-LE 11-2に加筆)

2. 柳沢保格の事績

柳沢保格は吉保より年長で、生年は慶安元（1648）年、没年は享保5（1720）年である。もとは曾禰姓であったが⁽⁴⁾、元禄5年嫡男保誠とともに吉保から「柳沢」姓と「保」の字を名乗ることをゆるされた。

堀井寿郎氏によれば、曾禰家は「吉保の祖父信俊から臣従の譜代中の譜代の家」であった⁽⁵⁾。

以下、分限帳類には次のようにある⁽⁶⁾。

「重臣略譜」

一、永慶寺様御代

御家老職

一、五千石 下野父退入事 柳沢権太夫
(中略)

川越甲府住宅

本名曾祢 柳沢権大夫

一、正覚院様御代ヨリ御家老職

一、元禄五壬申年 父子共ニ柳沢御称号御一字

一、常憲院様

文昭院様御成之節 度々御目見 御

紋御時服其外 御紋品々拝領之

これによると、家禄は5000石で吉保の父正覚院（安忠）の代から柳沢家に仕えたこと、5代将軍6代将軍にもたびたび接見する要職にあったことが読み取れる。

また、「元禄三年分限帳」では、家老の筆頭として「曾祢權大夫」の名があり、「元禄七年分限帳」では「御家老 1500石 曾祢權大夫」とある。享保年間のものと考えられる「甲府御城主之節分限帳」では、「隠居」の項の筆頭にその名がみえる。

前掲（4）の堀井氏の言葉を借りれば、「家臣随一の五千石を家禄として、柳沢の姓と吉保の一字保を頂き、貞刻改め、柳沢権太夫保格、名実とも筆頭家老」であった。

柳沢保格の業績とし高く評価されているのが、川越藩時代の三富新田の開発である。保格は家老として川越に身をおき、現地の人々との調整を慎重におこないながら開発に着手、見事成功に導くなどさまざまな大きな功績を残している⁽⁷⁾。

また、吉保が甲府城主をつとめた時期には、一度も入国することのなかった藩主吉保にかわって甲府にあり、吉保を補佐した。保格の勤めぶりは、柳沢吉保の側室正親町町子が著した『松蔭日記』にも記述がみられ、吉保の厚い信頼のもと筆頭家老として甲斐国のすべてを取り仕切ったことがうかがえる⁽⁸⁾。先に述べたが、『樂只堂年録』によれば、甲府城修築の際の棟札には奉行として名をつらねた。

吉保の時期におこなわれた三富新田の開発と、甲府城大改修という二大事業は、まさに柳沢保格の力量がとわれた土木事業であった。

また、吉保隠居後は、『福寿堂年録』宝永7(1710)年5月吉里初入国の記事の中で、甲府城にはじめて入城する吉里を案内し、到着の使者として江戸へ発ったことなどの記事がみられる⁽⁹⁾。まさに柳沢家の筆頭家老として、重責を担っていた様子がうかがえる。しかし、吉保が隠居した翌年にあたるこの年、保格は隠居して家督を嫡男保誠に譲り、退入と名乗った⁽¹⁰⁾。

3. 菩提寺曹洞宗増福山興因寺

柳沢保格の菩提寺となっている興因寺は、甲府市下積翠寺町にある。『甲斐国志』⁽¹¹⁾によれば、開基は新羅三郎義光子佐竹義業開基（興因寺殿傑山源英大禅定門）の曹洞宗の古刹で、常法幢七箇寺の一つである。開基は拈笑宗英和尚で、伊豆の最勝院を本寺としている。末派寺院は300におよぶ格の高い寺であったという。また、寛永～万治年中には甲斐国に配流された八宮良純親王の宿坊となったことでも知られている。

『寺記』⁽¹²⁾によれば、興因寺には本堂（11間×9間2尺）、開山堂（4間半×5間）、衆寮（10間半×5間）、江湖寮（7間×4間）、八ノ宮様御社（3間×2間半）、玄関（4間×3間）、庫裏（17間×7間半）、土蔵（7間×2間、3間×2間）の諸堂宇がかつてあったが、寛政6年火災により焼失した。現在は本堂と庫裏、山門などがあるのみである。かつての伽藍配置は不明であるが、墓所は現在の本堂の奥、裏山の平坦地に位置する。

4. 柳沢保格墓所の調査成果

4. 1 石造物

墓所は、基壇、石段、柳沢保格夫妻の墓2基、それ

に附随する石燈籠4基で構成されている。

①柳沢保格墓

基壇上むかって右側に位置する。銘文は次のとおりである。

(正面) 「智眼院心空道圓居士」

(左面) 「享保五年寅子年七月朔日」

(背面)

「顯考諱保格姓源氏曾禰字權太夫致仕號退入軒
新羅三郎四世孫上曾禰禪師嚴尊十五世之嫡裔也仕于
本藩與聞 国政歷年許多初名貞刻賜

柳澤氏及保字改今名二男長曰柳澤權太夫源保誠亦與
聞 国政多次曰柳澤帶刀源貞貴二女長曰自春禪尼
次未嫁顯考以慶安元年戊子三月三日生享保五年庚
子七月朔日卒享年七十三葬于山梨郡下積翠寺村增
福山興因禪寺境内 柳澤權太夫保誠建」

正面には保格の戒名「智眼院心空道圓居士」、左面には没年月日として享保5(1720)年7月1日が刻されている。また、背面の銘文から生年月日が慶安元年3月3日であることがわかる。

また、背面銘文にある「顯考」（私の父）の語より、墓石は柳沢保格の子らによって建立されたことがわかり、保格には二男二女があったことが記されている。嫡男は柳沢權太夫保誠で、次男は柳沢帶刀貞貴（柳里恭の名で知られる）のほか、長女、二女について記されている。

また、本姓は曾禰氏であること新羅三郎義光から数えて4世の曾禰嚴尊から15世の嫡裔とあり前掲（4）三富山多福寺の梵鐘の文言と一致する。曾禰氏は甲斐源氏の一流で、曾禰禪師嚴尊は『甲斐国志』⁽¹³⁾にも記載のある人物。曾禰氏は武田氏の親族である。

また、年次の記載はないが、主君である柳沢吉保から「柳沢」姓および「保」賜ったこと、隠居後退入軒と称したことが刻されている。

②同妻後藤氏の墓

基壇上むかって左側に位置する。保格の墓よりやや小ぶりの墓石である。銘文は次の通り。

(右面) 「享保四己亥載五月七日」

(正面) 「清照院月山理圓大姉」

(左面) 「柳澤帶刀源貞貴建愁焉」

(背面) 「後藤茂尤衛貞之女

柳澤退入源保格室」

柳沢保格の室は後藤貞之の娘で、享保4年5月7日に没したことが刻されている。建立者は次男柳沢帶刀貞貴である。

石燈籠はそれぞれの墓前に2基ずつ、あわせて4基

建てられている。

③石燈籠（右手前）

保格墓前（むかって右側）手前に位置する。竿と基礎部が残るのみで、上部を欠く。享保5（1920）年建立で、建立者は柳沢帶刀貞貴である。

（右面）「智眼院心空道圓居士碑前」

（正面）「石燈台 二基

柳澤帶刀源貞貴」

（左面）「享保五庚子載八月十二日造建焉」

④石燈籠（右奥）

保格墓前（むかって右側）奥に位置する。享保5（1920）年建立で、建立者は柳沢帶刀貞貴である。

（右面）「享保五庚子載八月十二日造建焉」

（正面）「 石燈台 二基

柳澤帶刀源貞貴」

（左面）「智眼院心空道圓居士碑前」

⑤石燈籠（左手前）

柳沢権太夫室後藤氏墓前（むかって左側）手前に位置する。竿と基礎部が残るのみで、上部を欠く。享保4（1719）年建立で、建立者は柳沢保誠である。

（右面）「享保四己亥載六月念六日造建焉」

（正面）「石燈基 二基

柳澤権大夫源保誠」

（左面）「清照院月山理圓大姉碑前」

⑥石燈籠（左奥）

柳沢権太夫室後藤氏墓前（むかって左側）奥に位置する。享保4（1719）年建立で、建立者は柳沢保誠である。

（右面）「清照院月山理圓大姉碑前」

（正面）「 石燈基 二基

柳澤権大夫源保誠」

（左面）「享保四己亥載六月念六日造建焉」

以上のように、両親の墓を兄弟で建立したことがわかる。また、享保5年7月1日に没した父保格の墓は、やはり石燈籠と同時に建立されたと仮定すると、同年8月12日に建立された。保格の墓石は兄保誠かあるいは兄弟姉妹、母の墓は弟貞貴が建て、父墓前の石燈台2基は弟貞貴、母墓前の石燈台2基は兄保誠が献じたことがわかる。

享保4年5月7日に没した母後藤氏の墓は、石燈籠と同時に建立されたと仮定すれば、同年6月26日に建立された。

4. 2 関連調査

興因寺が寛政6（1794）年に火災にあったことはすでに述べたが、同寺住職に電話照会で柳沢保格関連遺物の伝世の有無をたずねたところ、罹災の影響か柳沢保格にかかる文書および位牌等は所蔵していないとの回答であった。

また、夫妻の墓の脇には、同時期と思われる墓石が数十基並んでいる。そのうちいくつかの文言を調べてみたところ、時期は宝永～享保年間のものが多く、脇に姓名が記されていた。夫妻の墓石に比べるとずっと小型であるがその形状や配置から、柳沢権太夫家臣などの関連人物の可能性が考えられるが、未調査のため詳細は不明。なお、南側に位置する開山堂前に享保4年銘の水盤1基があるが、関連するものは現段階では不明。

5. おわりに

拙稿は、柳沢氏の甲府城修築に関する史料調査成果の一端である。柳沢氏は、川越でも甲府でも城郭の整備だけでなく城下町や用水路などインフラ整備を積極的におこなった。

柳沢家の筆頭家老として大いに活躍した柳沢保格の事跡を明らかにすることは、柳沢時代の甲府城における事績をあきらかにすることだけにとどまらず、甲斐国における柳沢家の具体的な政策の様相や、18世紀初頭の甲斐国の中木技術史を明らかにするという重要な使命を含んでいる。

今回の報告は史料紹介の域にとどまるものであるが、今後甲府城および甲斐国の姿をよりあきらかにする足がかりとなることを期待したい。

末筆ながら、甲府城跡史料調査にあたって快くご指導・ご協力をいただきました興因寺ご住職にまず御礼申上げます。また、柳沢保格家関連史料につきましては、柳沢文庫平出真宣氏ご教示を賜りました。ここにお礼申上げます。

また、拙稿執筆にあたっては、宮里学氏にご指導いただき、現地調査にあたっては岩下友美氏、垣内律子氏にご協力いただきました。この場を借りてお礼申上げます。

註

（1）柳沢権太夫保格の読みについては、「やすだ」「やすのり」など諸説あるようだが、ここでは後述する『松蔭日記』にならい後者を使用した。以下、柳沢保格とする。

また、「保格」「保格」が混用されている。

堀井寿郎氏は、『分限帳類集 下』（柳沢史料

集成 第3巻) の「家督分限帳について」のなかで、柳沢文庫蔵に藏される『樂只堂年録』、『福寿堂年録』、仮題「柳沢権大夫家譜」などをもとに「格」は誤りとしている。『大和人物志』(奈良県庁、1909年)における「格」の字の誤用が、印刷本に影響を与えていると指摘している。

しかしながら、後述の墓碑には「格」の字が刻まれているため、本稿では原典の引用以外では、以下柳沢保格とする。

(2) 屋敷は、甲府城西側に位置した柳門に隣接する位置(現在の甲府駅北西付近)にあった。この場所は甲府市教育委員会により発掘調査されている。

(3) 『樂只堂年録』によると、甲府城は宝永3年9月28日に上棟をむかえた。その棟札には「奉行家臣柳沢権大夫保格」と記されていた。

(4) 本姓曾禰氏に関連して述べると、後述する三富新田の新開拓地入植者たちの菩提寺として建てられた川越の三富山多福寺の梵鐘(元禄9年在銘)には「河越、拾遺源保明朝臣家臣、甲斐源氏逸見清光六男曾禰玄尊之後裔、曾禰権太夫源貞赳施主」と刻まれている。(野澤公次郎著、1996年『柳沢吉保の実像』(みよしほたる文庫3より)

なお、柳沢文庫には曾禰系譜が藏されているが、残念ながら、保格より前の数帖が失われている。

(5) 堀井寿郎氏、1994年、「里恭独言」『分限帳類集 下』(柳沢文庫保存会編、柳沢史料集成第三巻)による。

(6) 柳沢家家臣団については、柳沢史料集成として柳沢文庫保存会、1993年、『分限帳類集 上』(柳沢史料集成第二巻)および前掲(5)が詳しい。

(5) 『分限帳類集 下』(柳沢史料集成第三巻)において、同文庫の収蔵史料を中心とした分限帳が翻刻されている。

柳沢保格については、『分限帳類集 上』の「重臣略譜」「元禄三年分限帳」「元禄七年分限帳」「甲府御城主之節分限帳」にその名が見える。

(7) 三芳町、1987年、『三芳の歴史』85頁など。

(8) 『松蔭日記』廿五 ちよの宿(宝永4年春より秋にいたる)

保格と聞ゆるけいしは、をのがさきざきより、家ひさしきつかふまつりて、おぼえことなるが、年頃かひがねにいて、すべての事、

御はかりに申しをこなひつゝ、とくうるわしきおきなりけり、その頃、六十賀、君よりたまはるとて、杖にそへて、ものゝふのやたけの杖にふみ分けて千とせの坂もみちしるべせよ、いとたのもしきさきがけなりけり、

(上野洋三校註、2004年、『松蔭日記』岩波書店より引用)

また、宮川葉子氏も、その著『柳沢家の古典学(上)』—『松影日記』—(2007年、新典社研究叢書180)において、「廿一、夢の山」、「廿三、大みや人」の項に、保格が「柳沢家重鎮にふさわしい存在」として登場すると述べている。

(9) 『福寿堂年録』 宝永7年5月5日条

(10) 前掲(1)によると、享保2年、父保格の跡をついで、嫡男保誠は35歳で家老となった。しかし、その後保誠の嫡男が夭折したため、次男里恭を兄の養子とすることを願ったが、不行跡ありとされ、兄の養子として遺跡をそのまま継ぐことはできなかった。

(11) 佐藤八郎校訂、1968年、『甲斐国志』第二巻(大日本地誌大系46)、雄山閣

(12) 山梨県立図書館、1966年、『甲斐国社記・寺記』第三巻

(13) 佐藤八郎校訂、1970年、『甲斐国志』第四巻(大日本地誌大系45)、雄山閣

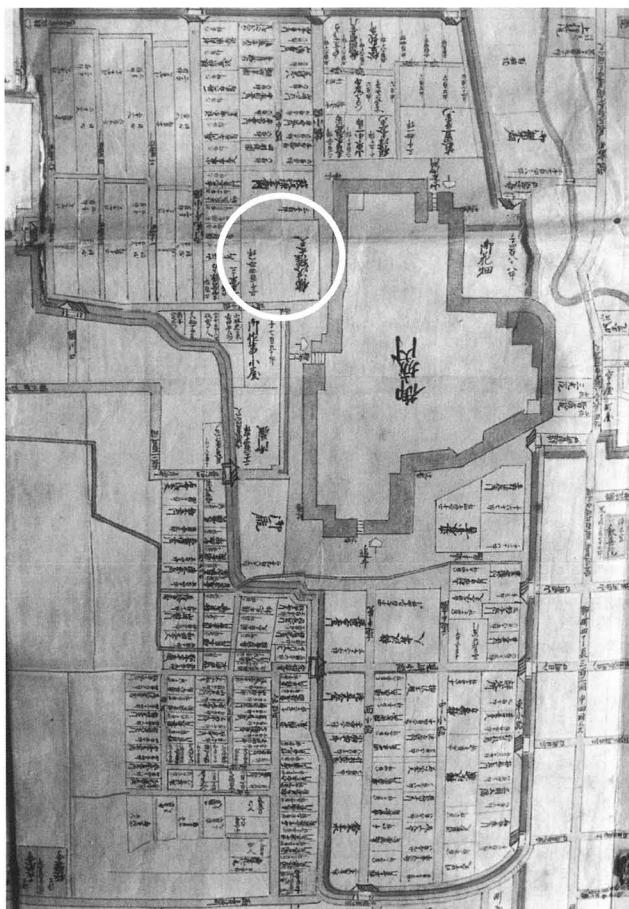


写真1 柳沢権太夫保格屋敷位置図
（「甲府御城下絵図」部分 柳沢文庫蔵）



写真2 柳沢権太夫保格墓所概況



写真3 柳沢権太夫保格夫妻墓所 (正面より)
(中央むかって右が柳沢保格、左が妻後藤氏の墓石)



写真4 (左) 柳沢保格墓石正面
写真5 (右) 柳沢保格墓石左面

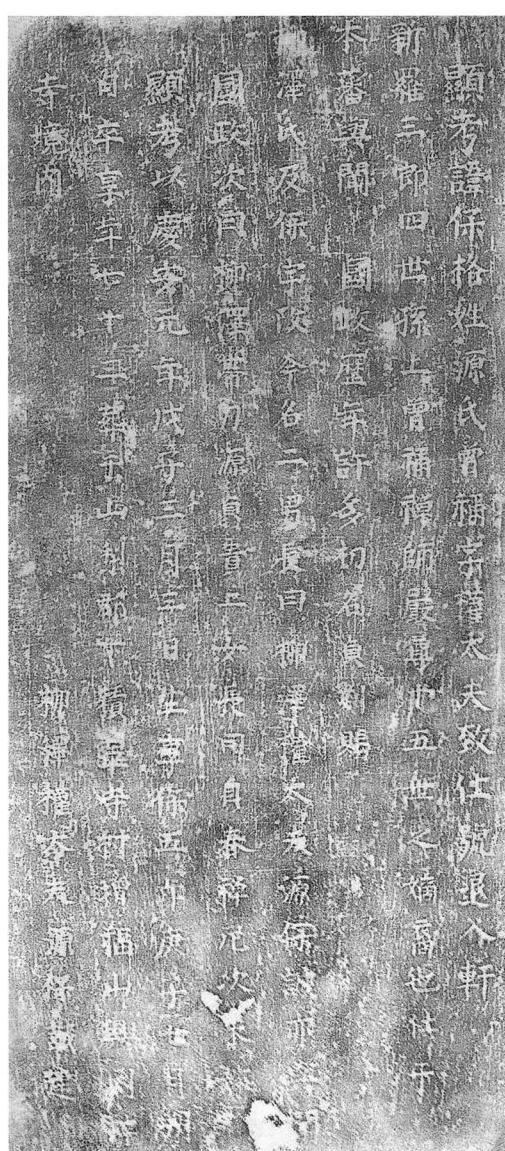
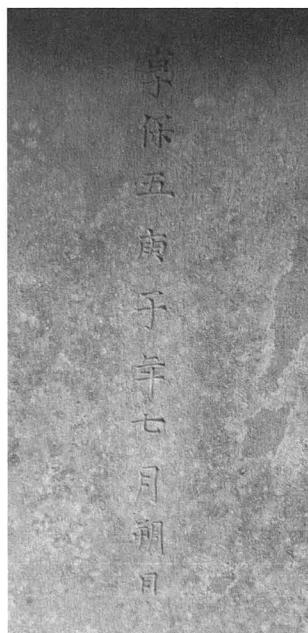


図2 柳沢保格墓石背面 (拓本)